

史料紹介：「徴古雑抄」古文書十三（征韓文書）所収の古文書について

中野，等
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/1547076>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 51, pp.1-37, 2008-03-31. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



史料紹介

「徴古雜抄」古文書十三（征韓文書）
所収の古文書について

中 野 等

『徴古雜抄』は法隆寺再建論争などでも知られる小杉楹邨（一八三四・天保五年～一九一〇・明治四三年）によって編纂された史料集である。現在は国文学研究資料館の所蔵であり、小杉自身の手になる稿本を含め「徴古雜抄」一三八冊、「徴古雜抄続編」四六冊、「徴古雜抄続編附録」五冊からなる。このほか同館所蔵の「小杉楹邨蒐集史料」のなかに「徴古雜抄別本」なるものが一一冊含まれている。以下、続編や続編附録を含む場合を『徴古雜抄』とし、狭義の「徴古雜抄」についてはガキ括弧を付して表記していく。小杉が阿波の出身で若年のころ徳島の地誌編纂などに関わっていたことから、『徴古雜抄』に収められた史料も阿波国に関連するものが多い。阿波国に関連するものの一部については、小杉の没後一九一四（大正三）年日本歴史地理学会により『阿波国徴古雜抄』として刊行され、その詳細を窺うことが出来る。しかしながら、同書巻末の『徴古雜抄』目録からも明らかなように、収録史料の範囲は単に阿波一国にとどまらない。ちなみに、『阿波国徴古雜抄』に収められた小杉の「徴古雜抄編纂の趣旨」には、次のようにある。

余いとけなきをりより、わが阿波国のむかひの事蹟を知らまくほりして、故老の何がし、及び夫君また学兄の誰がし等に問ひきゝて、かたはしかつがつも知り得るをもて、又なき楽しみとなせり、さるは其事蹟は多く古文書・古記録にのこれゝば、そを読みきかせらるゝを、よく記憶心にしめしからに、やうやう年をかさね来るまにまに、みづからもあなぐりもとめつゝ、からうじて弁へ知らるゝほど、おのづから古文書・古記といふものを、ふかく尊ぶ精神おこりて、其くさぐさ後

の参攷にもとおもふものは、見るに随ひ写しとりぬ、さはいへど、まづ此阿波国の典故をしらむとするには、朝廷の御制度に基づかざるを得ぬ勢ひなれば、なほ其すぢの先達に指教を仰ぎて、若壯の頃ほひにもなりぬるに、たまたま江戸に干役するつとめ出来たるは、実に好機なりと思ひて、其ついでに、いちじるき古典家の門をたゞき、正史をはじめて、すべて雑史・家乗・日記類より儀式・記録・律令・故実の書に涉りても研究し、其来往のをりをり、うちうち京都・大阪の名家にもたちよりなど、いとかりそめならずおもひ凝らして、本邦の太古固有の実況おひすがひて、海外の御まじらひものし給ひ、代々に外国の得長をめさせられ、わが短所を補充し給へるなど、さとり知るばかりになれりしが、恰も好し、国家の大勢いたくすゝみて、維新となりての後、此すぢの公務にかゝつらふ人数にかぞまへられしこのかた、再び東京に立出て、公私の間にわたり、猶きゝ見るなどの勝事、さきつ年にたちまさりて、繁かりしかば、例の見るに随ひ、みながらこれを写し、又其要を摘みて拔とり、或はかしこき御わたりの御物を始て、やむごとなき名族又は旧家、或は古寺社等に及びて、古文書・古記録・日記・家乗・縁起・流記・資財帳の類、なほ古図・古画・古地の沿革などにいたるまでも、おもふがまゝに手にまさぐり、これをうつしもする事を得たる、其徳によりて、みづからものしつる鈔本どもら、いづとなく年月多く歴て、百四十余冊を重ねれば、やがて部類を假定し、徴古雜抄と題署して、図画また続編ともに、わが私物にふかくをさめつゝ、平生に参考に資しつる事、亦十数年なりき、然るにかゝる一挙いつしかかつがつも親友に知られたるのみならず、或は修史館より参攷にせむとてめされしを、又さいつ年このかた帝国大学史料編纂掛よりもめさるゝものとなりぬるを按へば、わが私物ながら、いともいとも尊かし、（後略、旧漢字は改めたが、かなづかいは原文のまま）

後段に小杉楯邸の簡単な略歴をまとめているが、修史館専務・参謀本部総務局詰・古事類苑編纂専務・東京大学御用掛・文部省（のち東京大学文学部付属）古典講習科講師・帝国博物館技手といった公職に拠りつつ、収

録史料の範囲は国内各地に及んだようである。上の「徴古雑抄編纂の趣旨」は明治三十四年九月末に書かれているが、一定の編纂を終えた『徴古雑抄』が当時の史学界においてきわめて高い評価を獲得していたことを知る。ただし、史料集の常として考証作業自体は小杉の手元で継続していたようである。後述のように、いまだ編成途上といった感が強く、収録史料の随所に「按此文書ハ」といった調子で始まる朱書きの注が施されているが、途中で終わっているように見えるものも少なくない。小杉が『徴古雑抄』をあくまで「私物」と位置づけているのもこうした事に拠るのであろう。したがって、厳密には稿本の域を出ない訳であるが、無論『徴古雑抄』の学術的価値を損なうといった性格のものではない。

『徴古雑抄』が国文学研究資料館（国立史料館）の所蔵となる経緯については、戦後（一九五二年・昭和二十七年）に古書店から購入とあるだけで詳細は判然としない。それはともかくとして、史料館では早速『史料館所蔵史料目録 第四集』（一九五五年・昭和三十〇年）に『徴古雑抄』の目録を収めている。その扱いは阿波蜂須賀家文書の附録というもので、部門別の冊数をあげた便宜的なものであるが、『徴古雑抄』の概要を知るには充分である。その後、『収蔵史料都道府県別一覧』（国文学研究資料館ホームページ）に、『徴古雑抄』一冊ごとの表題が示されたが、収録史料の具体的内容に及ぶものではない。

今回、細目録のかたちで紹介するのは『徴古雑抄』の一部であり、表題にもあげたように「徴古雑抄」の「古文書十三」と部分けされた三分冊で「征韓文書」の副題をもっている。明治期の編纂史料ということでこうした名称が付せられているが、上巻の表紙裏には「征韓文書といふ題目ハ、いま榎邨か假りに命する所なり、諸書に散見し、或ハ単行古文書の中に就て、征韓に関るものをつとにかきつめおくものぞ、これもいつとなく三巻の成冊子となりぬ」と書き入れがあり、副題自体は暫定的なものであった。いずれにしろ、豊臣政権による大陸侵攻（朝鮮出兵・朝鮮侵略）に関わる史料を諸書・諸家文書から集めていたが、いつしか三巻のまとまった冊子となったとする。三分冊の詳細は後掲の細目録に譲るが、その大略をまと

めておくとおおむね次のようになろう。

上巻に用いられた料紙は一貫して薄い無地の楮紙であり、原則として関係史料を編年で配列したものである。戦役の開始以前には「天正十八年」の見出しが例外的に見られるのみであるが、開戦後には「文禄元年壬辰年」「文禄二年癸巳」といった見出しが設けられている。しかしながら、編年配列は必ずしも徹底したものではなく、文禄元年分の後段には出所を同じくする古文書類が一括して配列されている。船手を勤めた菅達長（平右衛門尉）の受給文書（菅家の子孫は鳥取藩士となる）などが、その顕著な例である。このように、原理を混成させるかたちで史料が配置されているので、なかなか判断に苦しむところではあるが、年紀が見出しとしてあげられているところから、編年体の史料集を目指したことは間違いなからう。

続く中巻は前半部と後半部とに二分される。前半は上巻と同質の料紙を用いており、こちらも徹底したものではないがやはり編年配列を意図しているようである。恐らくは上巻の補遺編と言った位置づけであろう。これに対して、後半部分は「前田侯爵御蔵書」として加藤清正関係の史料を集録している。冒頭に次のような目録を挙げ、筆写した史料が続く。

加藤肥州遺書目録

朝鮮物成書	五巻
秀吉公御朱印御堅物	拾壹通
同折紙	廿六通
同禁制 但三通共同文	三通
同定 但同上	四通
秀次公御朱印物	弍通

この部分については、「参謀本部」「文部省」「帝国博物館」といった銘を有する罫紙が用いられており、「朝鮮物成書」には朝鮮側関係者の花押影、朱印状写については秀吉や秀次の朱印影が忠実に模写されている。前田家所蔵の史料を実見した調査の成果と考えてよからう。中巻の摘要はこうしたところであるが、このほか前半部と後半部の間に厚手の楮紙を料紙とする高麗国充ての禁制が集録され、「以上六十七張 加藤肥州遺書」と

して前田家所蔵の関係史料を結んだ後に史料が三点、さらに中巻を製本した後に「投書」と銘打たれたものが最末丁に貼付されている。これらの意味づけについては後考に委ねたい。

最後の下巻には「帝国博物館」および「臨時全国宝物取調局」の罫紙が用いられている。具に見ていくと、この巻も実は一貫した構成ではなく大きく三つに分かたれるようである。序盤の部分には文禄二年正月から六月にいたる間の史料を日次に配列している。巻首には「韓陣文書 文禄二年

正月二月三月」とあることから、一日ごとの史料を三か月単位にまとめていく体裁を考えていたようである。比較的丁寧な筆跡で、一部については花押影・印影が写し取られている。編年体ということで、ここには上巻ですでに採録したような文書も再採録されているが、格段に整序されたという印象が残る。中盤には現東京国立博物館所蔵の「誓紙一卷」が「帝国博物館所蔵一卷」として収められ、そののちに（慶長三年）正月二十五日付の加藤清正（加藤主計頭）充て秀吉朱印状と（文禄元年）六月三日付の宗義智（羽柴対馬侍従）充ての秀吉朱印状の二点があげられている。このうち前者については「東京帝室博物館陳列古文書」なる史料に同内容のものが集録されているが、後者についてはこの「徴古雜抄」にしか伝わらない文書である。幾分想像を交えることには為るが、後者についてもある時期帝室博物館（帝国博物館が一九〇〇年すなわち明治三三年に改称）に「陳列」されたのではなかろうか。下巻中盤に収められる「誓紙一卷」と秀吉朱印状の写し二点は東京帝室博物館において小杉が採録したものと考えたい。終盤については具体的明示もないが、序盤と同様の性格を持つものようである。但し対象時期はすこしとんで、文禄四年の正月から十二月に及ぶ。なお、下巻については紙を二枚重ねて綴り込んだところが二か所ほどあり、ここについては墨付をみることが出来ない。一旦綴じ直すことが可能であればこの部分を開披できるが、現状ではそれも不可能なので、この部分については細目録への掲載をあきらめている。

さて、こうしてみると「征韓文書」として三分冊で構成されるものの、必ずしも一貫した編纂事業の成果といったものではないことがわかる。

恐らく、下巻の序盤と終盤に見えるような、年月日毎に関係史料を配列するかたちでの史料集が構想される最終的なかたちではなかったかと考える。いずれにしろ、「征韓文書」として一括されてはいるものの、次元を異にする数種の稿本が混在したものであることを確認できた。

ところで、『徴古雑抄』には散逸してすでに現物を確認できないものも多く収められているが、当該分野においても事情は同じである。さきにふれた（文禄元年）六月三日付の宗義智（羽柴対馬侍従）充ての秀吉朱印状などはそうした好例である。そうした一方で、今日からみると疑問のある文書も少なくない。したがって、細目録紹介の意義はまずこうした確認作業を進めていくことにある。

ついで、明治期にあって大陸侵攻（朝鮮出兵・朝鮮侵略）がどのように認識されていたのかについて考える手がかりとしたい。たとえば、この「徴古雑抄」古文書十三は「征韓文書」としながら、上巻の冒頭に掲げられた文書は建治元年十二月八日付の関東御教書（東寺文書）と建治二年後三月五日付の書状（島津文書）であり、ついで南北朝期に高麗から日本に派遣された羅興儒にかかわる文書二点が続く。もとより、前二者は元寇の発端に関わり、建治二年の島津文書には「高麗征伐の為、武士を遣わされ…」という書き出しをもっている。一方、後の二点は倭寇に悩む高麗がその禁圧をもとめて日本に派遣した使節に関わる。すなわち、羅興儒という人物はのちの朝鮮通信使の先例とも位置づけられる人物である。小杉楹邨は秀吉の大陸侵攻（朝鮮出兵・朝鮮侵略）に関わる史料集を編むにあたって、これらの史料を冒頭に掲げた。「征伐」と「通信」、一見相反する史料を大陸侵攻の淵源として位置づけたことがわかる。上巻が初期段階における編年作業を反映した書物であることはさきにもふれた。小杉の場合、編年作業を進めていく上で『中外経緯伝』に依拠する部分がかなり大きかったようである。周知のように、『中外経緯伝』は近世後期国学者の伴信友によって編まれた書物であり、古代から近世初期にいたる日本の対外交渉について、その歴史をまとめたものである。このうち第四部・第五部・第六部が征戎遺文類第一から第三にあたっており（小杉は「中外経緯伝遺文部」と

称している）、大陸侵攻（朝鮮出兵・朝鮮侵略）の史料を集録している。天正二十（文禄元）年、文禄二年といった年紀の史料を配列するにあたって、『中外経緯伝』が基準となっているようであり、小杉榎郎が伴信友の『中外経緯伝』に対して非常に高い信頼をおいていたことは間違いない。詳細はのちに譲るものの、史料の選択基準を考えることで小杉榎郎の場合における認識のトレースがある程度可能になるのではないかと考えている。

さて、細目録は表のかたちで紹介するが、つぎに収録史料をいくつか便宜的に採り上げて、表にまとめたデータとの関連を説明することで凡例にかえたい。まず、例示するのは編年に配置された上巻のなかで文禄二年の冒頭にあげられた史料である。

文禄二年癸巳

『中外—— 同』

卒以飛力、致言上候、一昨日昨日漢南勢百万騎、至于当表令出張、捫破小西摂津守要害、既都近辺へ進來、輝元先勢・小早川・立花等挑合戦、有勝負区々也、某雖欲為助勢、三奉行御停止之旨、達而被制之、雖然於無助成者、悉討死無疑、然間不用三人之下知、相救遂合戦、得大利、敵三万八千討取之畢、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

正月廿七日

備前宰相豊臣朝臣

秀家 判

安威摂津守殿

細目録では上・中・下巻毎に分類し、それぞれに通し番号をあげている。上の史料は上-105番に該当する。このような書状については特段表題をあげてはいない。したがって、採録されるデータとしては日付と発給者、受給者である。ただし、この史料については、文書の右肩に朱による書き入れがある。『 』は朱書であることを示しており、ここでは右の文書が『中外経緯伝』の「征戎遺文」から採録されたことを示している。細目録ではこうした書き入れを注記として処理している。

ついで晋州城攻略戦にかかわる史料から例示を行う。上-133番の史料である。

○ 晋州牧使居城一番乗覚

一番二乗候へ共、鉄砲当流落	加藤主計頭内	森本儀太夫
森本二続乗候、然共名乗不申候	黒田甲斐守内	後藤又兵衛
後藤ト同断	同人内	堀 久七
後藤・堀に一足おそく乗候へ共、後藤か上帯引すへ		
妙法之幡指二番ト名乗、其上一番ニ首討取之		
	加藤主計頭内	飯田角兵衛

以上

六月七日

大谷刑部少輔

増田右衛門尉

石井治部少輔^(ママ)

浅野弾正少弼殿

右、山中吉内留書

こうした史料については頭書を表題として採用している。ついで日付と発給者、受給者をデータとして採録し、最後に見える「右、山中吉内留書」の部分を出典として細目録に収めた。以上、趣のことなる二点の史料を具体的に提示し、細目録の凡例について説明した。

付 小杉楹邨略歴

一八三四・天保五年	徳島で誕生
一八四八・嘉永元年	元服、西尾氏に仕える
一八五四・安政元年	西尾に随って江戸へ
一八五七・安政四年	紀州藩古学館において国典歌文を学ぶ
一八六九・明治二年	徳島藩庁より長久館国典教授を命じられる
一八七〇・同 三年	阿波国続風土記編纂掛兼務
一八七二・同 五年	阿波国古風土記名蹟考一冊成る
一八七四・同 七年	教部省十一等出仕
一八七五・同 八年	阿波国遺存古文書考証五冊成る
一八七七・同一〇年	内務省御用掛、社寺局専務取扱

一八七八・同一一年	修史館第二局甲科専務
一八七九・同一二年	東大寺正倉院四十五卷文書頭注成る
一八八〇・同一三年	参謀本部総務局詰
一八八一・同一四年	文部省五等属、古事類苑編纂専務
一八八二・同一五年	東京大学御用掛、文学部付属古典講習科国書准講師
一八八九・同二二年	帝国博物館歴史部美術部傭
一八九〇・同二三年	帝国博物館技手 臨時全国宝物取調局書記兼鑑査掛
一八九七・同三〇年	古社寺保存委員
一八九八・同三一年	帝国博物館臨時鑑査掛
一八九九・同三二年	古社寺保存国宝計画調査囑託 帝国博物館鑑査課古文書科主任兼務 御物鑑査御用 東京美術学校教授兼任 東京帝国大学文科大学講師囑託
一八九〇・同三三年	免東京帝国博物館技手
一八九一・同三四年	国語伝習所講師
一九〇四・同三七年	免東京帝国大学文科大学講師
一九〇六・同三九年	私立大成中学校長
一九〇八・同四一年	国学院講師
一九一〇・同四三年	国語伝習所長 叙従六位 東京帝室博物館評議員、勅任待遇 没（七十七歳）

（付記）

本稿は科学研究費補助金、基盤研究（C）（平成19～22年度）課題番号19520575（研究代表者・中野等）「『朝鮮出兵』の記憶と記録化に関する基礎的研究」の研究成果の一部である。史料調査については国文学研究資料館（旧史料館）に特段の御高配を賜った。データ整理については九州大学大学院比較社会文化学府の穴井綾香さんに御世話になった。記して深謝の意を表したい。

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
上	1		建治元年十二月八日	武蔵守在判・相模守【時宗】同	武田五郎次郎【信時】殿
上	2		建治二年後三月五日	【島津大炊助】久時在判	吉富次郎殿
上	3		永和元年十二月九日	備中守在判	赤穂郡寺社本所地頭御家人御中
上	4		永和元年十一月十九日	右近将監	高野備前権守殿
上	5		(天正十一年癸未)	日本国関白	小琉球
上	6	琉球王贈秀吉公書	(天正十七年己丑五月)	—	—
上	7	秀吉公報琉球王書	—	—	—
上	8	奉書	万曆十八年三月 日	朝鮮国王李	日本国王殿下
上	9		(万曆十八年三月 日)	—	—
上	10	奉書		日本国関白秀吉朱印	朝鮮国閣下
上	11		天正 三月廿八日・文禄二年	—	—
上	12		【天正十五丁亥】五月十五日	御判	生駒雅楽頭とのへ・生駒三吉とのへ
上	13	朝鮮陣為御用意大船被仰付覚	天正十九年正月廿日	—	—
上	14	朝鮮陣軍役之定	天正十九年三月十五日	秀吉	—
上	15	就高麗陣掟条々	—	—	—
上	16		天正十九年九月下旬	御朱印	—
上	17		三月八日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上	18	御陣十人召連候者之荷物目録	天正二十年五月五日	—	安芸宰相とのへ・備前宰相とのへ・小早川とのへ【称■■■】
上	19	朝鮮国御進発の人数つもり	(文禄元壬辰年)	—	—
上	20	先手備之事	天正廿年六月三日	秀吉公御朱印	羽柴土佐侍従とのへ・生駒雅楽頭とのへ
上	21		天正廿年	秀吉公御判	江戸大納言殿
上	22		(文禄元年壬辰三月朔日)	—	—
上	23		三月十一日	秀吉判	宮本佐渡守殿
上	24		卯月廿九日	秀吉朱印	片桐市正とのへ・加須屋内膳正とのへ
上	25	敬白起請文前書之事	卯月十日	各連判	奉行衆
上	26		九月朔日	山城守瀧俊	留主の各
上	27		五月二日	秀家判	小西摂津守殿
上	28		五月三日	秀吉公御朱印	小西摂津守殿
上	29		天正廿年壬辰六月三日	御朱印	—
上	30		五月六日	なこやより大かう	おね御返事
上	31		五月十八日	山きち	御ひかしさま・御きやくしんさま
上	32		五月十三日	家一御判	羽山斎

出典	注記	備考
東寺文書		
島津文書	『帝王編年記云…』、『帝王編年記又云…』	
東寺文書		
	『本朝通鑑永和元年引東国通鑑云、春二月高麗羅興儒請行成日本乃以為通信使遣之…』、	
朝鮮征伐記	(頭注) 天正十年六月光秀職信長信忠秀吉誅光秀十一年四月滅勝家五月秀吉殺信孝 (傍注) 此状琉球へ達シケレハ、琉球ノ貢臣鄭礼大明へ是ヲ奉リ…	
(以上二通) 外国往来書		
	『天正十八年九月朝鮮使来朝』、右原本 竪一尺九寸二分横三尺七寸五分	
以上二通京都妙法院宮所蔵	右原本竪一尺九寸二分横三尺七寸四分、 謹封…右竪一尺九寸二分横三寸五分	
太閤記・征伐記同		文書の右に「天正十八年」の見出し
立入氏覚書		
右讃岐高松藩生駒氏所蔵	『中外経緯伝遺文部同』	
	『中外——同』	
	『中外——同』	
	『右三紙中外経緯伝ニ太閤記ニ出トアリ』	
右小早川能久筆記所蔵	『中外——同』	文書の右に「文禄元年」の見出し
此書豊臣家右筆太田和泉守源資方慶長十三年所記『畢』天正記第七卷ニ所載ナリ		太閤軍記との異同を朱書
『右武家古文書所蔵』	『中外——同』	
	『中外——同』	
『右下野宇都宮某氏所蔵』	『中外——同』	
右讃岐高松藩土宮本佐渡守裔松本民共鑑蔵	『中外——同』	
『右片桐主膳正所蔵』	『中外——同』	
『右太閤記』	『同』	
右出羽国久保田佐竹殿家士平塚氏後孫貞壁某所蔵	『中外——同』	
	『中外——同』	
『右二書古今感状集太閤記同』	『同』	
右武家古文書	『同』	
『一古家所蔵』	『同』	
右若狭国小濱組屋邦彦所蔵屏風中所出云	『同』	
右関但馬守家臣細野一郎右衛門蔵	『同』	

冊 枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
上 33		五月十八日	秀吉	榊原式部大輔とのへ
上 34		五月十八日	秀吉	大徳寺
上 35	禁制	日本天正二十年壬辰	安芸宰相代宍戸元次	—
上 36		卯月十九日	清正・直茂	長東大蔵大輔殿・木下半助殿・駒井八右衛門殿
上 37		卯月廿一日	清正・直茂	長東大蔵大輔殿・木下半助殿
上 38		卯月廿一日	清正	各
上 39		卯月廿一日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 40		四月廿九日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 41		五月朔日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 42		五月二日	清正	長東大蔵大輔殿・木下半介殿
上 43		五月十六日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 44		六月朔日	清正	長東大蔵大輔殿・木下半介殿
上 45		八月十三日	—	—
上 46		—	—	—
上 47		極月八日	—	—
上 48		—	—	—
上 49		—	—	—
上 50		—	—	—
上 51		十月十日	御朱印	関白殿
上 52	覚	天正廿年五月十八日	秀吉御朱印	関白殿
上 53	高麗御陣ニ付用意事	六月十日	藤堂佐渡守	小山式部大夫殿
上 54	来春早々唐入御陣用意之事	天正十九 九月十六日	藤堂佐渡守	小山助之丞殿m
上 55		正ノ廿日	■ (花押)	—
上 56		天正拾九年十月廿日	毛利老岐守 (花押)・黒田甲斐守 (花押)・小西摂津守 (花押)・加藤主計頭 (花押)	—
上 57		『天正廿年則文禄元年也』四月廿四日	木村常陸介一 (花押)	駒井中務少輔殿
上 58		五月十六日	秀吉	榊原式部大輔殿
上 59		十月十九日	秀吉御判	関白殿
上 60		貳月廿八日	関白	琉球国司
上 61		六月二日	朱印	相良宮内大輔とのへ・波多三河守とのへ・井上新助とのへ
上 62		六月八日	秀吉朱印	上京中
上 63		六月九日	浅野彈正長政判	上京中
上 64		六月十五日	秀吉	榊原式部大輔とのへ

出典	注記	備考
右榑原遠江守蔵	『同』	
右紫野大徳寺蔵	『同』	
右長州萩洞春寺秘蔵	『同』	
	『四月廿一日ノ誤カ』	
	別紙	
	別紙	
	別紙	
	別紙『続カ』	
右朝鮮在陣書翰ハ福智山城天守ノ張付ヲ修補セシニ其下張ニ明智兄弟細川幽齋等ヲ始トシテ各人ノ手紙種々アリシ内ノ無名氏反古ナリ福知山城ハモト明智左馬助ノ経営ニ其後小野木氏ノ時ノ物ナルヘシト云ヘリ戊午七月	同	
右二則原本水府影考館所蔵其藩儒臣会沢子写一本贈余此本即是也 赤城徳識 右紀伊国牟婁郡安宅莊久本村小山氏所蔵	『従太閤関白秀次公へ被進案書イ』	
右同国郡三前郷西向村小山氏所蔵		
右水戸石川久次右衛門模本		
右同人模本		
右源君文庫		はがれた付箋あり
右南都二條法印家蔵	従秀吉公琉球国司へ返状	
『本書京人某氏所蔵以山田清安紹介見之』	『中外――同』	
	『中外――同』	
右三通京人所蔵『右二通上京組所蔵伝十七通古文書中』	『中外――同』	
右榑原遠江守蔵	『中外――同』	

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
上	65	名護屋御留主在陣之衆	七月廿二日	御朱印	—
上	66		六月朔日	—	—
上	67		六月廿四日	成鏡道之内永興 ³⁾	長東大蔵大輔殿・増田右衛門尉殿
上	68		六月廿四日	—	長東大蔵大輔殿・増田右衛門尉殿
上	69		七月廿三日	—	長東大蔵大輔殿・木下半助殿・駒井中務少輔殿
上	70		七月廿三日	—	—
上	71		七月廿五日	加藤主計頭	浅野彈正少弼殿
上	72		十一月三日	石治少三成（花押）	政宗様御報
上	73		天正廿年六月三日	—	—
上	74	大坂よりなこやへ次舟	天正廿年八月 日	（朱印）『豊臣秀次』	兵庫
上	75	京大坂よりなこや迄つき馬次夫之事	天正廿年八月 日	（朱印）『豊臣秀次』	兵庫奉行
上	76		—	—	太閤とのへ
上	77		—	—	—
上	78	からへ御陣立候時金日取之事	天正廿年たつ之とし三月吉日	—	—
上	79		十二月十二日	善明状	伊豆さま
上	80		十月廿二日	輝元判・景勝判・秀家判・利家判・家康判	御弓鉄砲衆惣中
上	81		天正廿年六月三日	秀吉朱印	羽柴土佐侍従とのへ・生駒雅楽頭とのへ・右諸将名称令略之
上	82		三月六日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	83		正月廿八日	秀吉公朱印	菅二三郎とのへ
上	84		二月九日	秀吉公朱印	菅平右衛門入道とのへ
上	85		十二月四日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	86		正月廿八日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	87		七月十七日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	88		十一月十日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	89		二月十六日	秀吉公朱印	加藤左馬助とのへ・九鬼大隅守とのへ・菅平右衛門尉とのへ
上	90		五月廿六日	秀吉公朱印	菅平右衛門とのへ
上	91		慶長式 二月廿日	秀吉公朱印	菅平右衛門尉とのへ
上	92		五月朔日	秀吉公朱印	菅二三郎とのへ
上	93		正月十七日	秀吉公朱印	菅平右衛門入道とのへ・同三郎兵衛尉とのへ・同右衛門尉とのへ
上	94		十月十六日	輝元（花押）・景勝（花押）・秀家（花押）・利家（花押）・家康（花押）	菅平右衛門尉殿
上	95		九月九日	次左衛門（花押）	—
上	96		九月廿二日	秀吉朱印	十六人上使衆中へ
上	97		九月廿四日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿

出典	注記	備考
『右太閤記』	『同』	太閤軍記との異同を朱書
右山中吉内留書	『中外——同』	
右南都二條法印家藏		
右二通武藏国多摩郡二又尾村名主太郎 左衛門所藏		
右明国来聘女房奉書源君文庫		
	右一紙	
	右一紙	
右三紙有馬中務大輔家来湯浅平治所藏 右家康公自筆坪内宗兵衛定次所贈同姓 半三郎定茂所藏		
右一紙雅楽頭親正所獲同姓主殿親章所 藏文書之中		
右十三紙因幡鳥取藩士菅隼理所藏		
右毛利家領長州大津郡通浦漁人所藏其 祖軀子次左衛門自朝鮮所贈来書云	『中外——同』	
『右片桐主膳正所藏』		

冊	枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
上	98		九月廿二日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上	99		十月廿日	—	—
上	100		十一月十日	秀吉朱印	片桐市正とのへ
上	101		十一月十日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ
上	102		十一月十四日	秀吉	加藤主計頭殿
上	103		極月六日	秀吉御朱印	羽柴土佐侍従殿・蜂須賀阿波守殿・戸田民部少輔殿・生駒雅楽頭殿・福岡左衛門大夫殿
上	104		十二月十日	御朱印	加藤主計頭殿
上	105		正月廿七日	備前宰相豊臣朝臣秀家判	安威摂津守殿
上	106		二月八日	秀吉御朱印	羽柴備前宰相殿
上	107		二月十日	—	太閤とのへ
上	108		二月廿八日	御朱印	毛利右京大夫殿
上	109		三月十九日	御朱印	羽柴上野介とのへ
上	110		卯月二日	御判	小早川筑前守殿
上	111		卯月三日	御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
上	112		卯月十一日	御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
上	113		卯月廿日	秀吉公御朱印	羽柴伊達侍従
上	114	立花宗茂公朝鮮之次第御咄之覚	—	—	—
上	115		文禄二 二月朔日	隆景判	宇佐美民部少輔殿
上	116		二月八日	御朱印	備前宰相殿
上	117		三月十九日	主膳宗一	平善男
上	118		三月廿日	加藤主計頭	長束大蔵大輔殿・木下半介殿
上	119		卯月十四日	加藤主計頭	長束大蔵大輔殿・木下半助殿
上	120		卯月十七日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上	121		—	—	—
上	122	覚	文禄二年五月朔日	秀吉在判	高麗陣衆各御中
上	123		五月九日	■	せ川うねめ殿にて人々申給へ
上	124	朝鮮国御仕置之城之覚	文禄癸巳二年五月廿日	秀吉御朱印	—
上	125		五月廿四日	御朱印	—
上	126		五月廿八日	増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・大谷刑部吉継・小西摂津守行長	—
上	127		仲夏日	秀吉朱印	達沈惟敬遊撃將軍
上	128		—	—	—
上	129		—	御朱印	朝鮮国各在陣之衆中
上	130		六月朔日	浅野彈正少卿・黒田如水軒	増田右衛門尉殿・石田治部少輔殿・大谷刑部少輔殿各御中
上	131		万曆二十一年六月初二日	淳和君・臨海君・行護軍・南兵使・長溪君	加藤右馬殿
上	132		万曆二十一年六月初四日	朝鮮王子臨海君	—

出典	注記	備考
右片桐主膳正藏	『中外――同』	
『右古今感状集』	『同』	
右山中吉内留書	『同』『樞邨云此月日前章九月廿四日ニ作ルモノト同文ナリ未知孰是』	
右武家古文書	『同』	
右太閤記	『中外――同』	文書の右に「文祿二年」の見出し
右同上	『同』	
右一秘書	『同』	
『右古今感状集』	『同』	
右武家古文書	『同』	
右古今感状集	『同』	
	『同』	
右二紙立花家所藏	『同』	
右武家古文書	『同』	
右沓冊ハ筑後柳川の土何某か覚書とて柳川の僧送り候をうつし置候なり		
右立斎旧聞記所載	『樞邨云此文太閤記ニ載スル所前條ニ抄写スルモノト大同小異ナリ未知孰是』	
右筑前国三池立花数馬所藏	『中外――同』	
右太閤記		
右太閤記		
右二紙武家古文書		
右太閤記		
右同上		
右同上	唐使船中饗応之詩	
右同上		
右征伐記		
右紀伊藩士九鬼氏藏（家祖九鬼九郎兵衛吉隆初加藤清正役下朝鮮其末祖後為紀州家臣故子孫藏遺書下同）		

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
上	133	晋州牧使居城一番乗覚	六月七日	大谷刑部少輔・増田右衛門尉・石井（ママ）治部少輔	浅野彈正少弼殿
上	134	覚	文禄二年六月十一日	—	—
上	135		六月廿七日	秀吉朱印	増田右衛門尉・石田治部少輔・大谷刑部少輔・小西拱津守
上	136		文禄二年癸未六月廿八日	秀吉朱印	—
上	137		—	—	—
上	138		文禄二年七月四日	—	—
上	139		七月三日	秀吉書判	加藤主計頭とのへ
上	140		七月廿一日	御朱印	安芸侍従殿
上	141		文禄二年七月七日	御朱印	安芸侍従とのへ
上	142		七月廿六日	秀吉	榊原式部大輔とのへ
上	143		八月六日	秀吉公御朱印	宇喜田宰相とのへ・羽柴安芸侍従とのへ
上	144	定	文禄二年癸巳八月七日	—	釜山浦
上	145		六月十九日	御判	毛利兵庫頭殿・立花左近将監殿
上	146		九月廿三日	御朱印	宇喜田宰相とのへ・羽柴安芸侍従とのへ
上	147		後九月廿六日	秀吉公御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
上	148		十一月八日	小西拱津守行長判	浅野彈正少弼殿
上	149		十一月十日	御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
上	150		文禄二年十二月 日	龍伯	中山王
上	151		—	—	—
上	152		菊月十五日	正家	五郎右衛門殿・藤五郎殿
上	153		正月廿八日	秀吉公御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
上	154		卯月十六日	秀吉公御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
上	155		文禄三年五月三日	—	朝鮮在陣衆参
上	156		六月廿三日	秀吉朱印	脇坂中務少輔殿
上	157		六月廿四日	秀吉御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
上	158	日本両使入朝筆談事	—	—	—
上	159		—	朝鮮国臣礼曹司季榮春尹起辛等敬白	—
上	160		万曆二十三年乙未正月二十一日	—	—
上	161		—	—	—
上	162	朝鮮再征秀吉公御人数分数目録	—	—	—
上	163	條々	慶長貳年二月廿一日	『秀吉』朱印	筑紫上野介とのへ『藤堂佐渡守とのへ 按ニコノ條目ハ銘々々達セラレシモノトオホユ』
上	164		慶長貳年二月廿一日	朱印	—
上	165	朝鮮松雲贈清正書	皇明万曆二十五年三月二十一日	朝鮮北海松雲花押	—
上	166		三月廿八日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ

出典	注記	備考
右山中吉内留書		
右紀伊藩士九鬼氏所蔵	加藤清正軍令	
右太閤記	対大明勅使可告報之條目	
右同上		
右同上	秀吉公異形の御出立にて御遊興の事	
吉野日記一名高麗もちのさうし	松浦肥前入道法印宗静士吉野甚右衛門 (花押カ)	
右二紙毛利家記所載	右感状ニ添下サレタル仕置書	
右榑原遠江守所蔵		
右征伐記		
右古今感状集		
右征伐記		
同上		
右武家古文書		
同上		
右武家古文書		文書の右に「文禄三年」の見出し
右武家文書		
右太閤記		
右播磨国龍野城主脇坂氏所蔵		
右武家古文書		
右征伐記		
右肥後国飯田郡中尾彥星山本妙寺所蔵		
	明国使楊方亨沈惟敬贈秀吉公書二通	文書の右に「文禄四年」の見出し
右征伐記	二月初三日又頒二使勅諭及沈惟敬勅諭 各一道皆申勅三事各要遵行	
	慶長二年二月廿一日秀吉公朱印在之	文書の右に「慶長二年」の見出し
	『従太閤高麗之先手へ被遺案書イ』	
右二通本書寄合衆筑紫主水所蔵		
右青木敦書昆陽漫録所載		
右播磨国竜野城主脇坂氏所蔵		

冊 枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
上 167		慶長二 五月朔日	秀吉朱印	羽柴対馬侍従とのへ
上 168		万曆二十五年五月十六日	—	—
上 169		—	—	—
上 170		—	—	—
上 171		七月十四日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ
上 172		六月廿三日	御朱印	藤堂佐渡とのへ
上 173		七月廿三日	熊谷内蔵允在判・垣見和泉守 同・早川主馬首同・竹中源助 同・毛利民部大輔同・太田飛 騨守同・福原右馬助同	—
上 174		八月九日	御朱印	藤堂佐渡とのへ
上 175		八月九日	御朱印	羽柴薩摩侍従とのへ・島津 又八郎とのへ
上 176		八月十日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ
上 177		八月十五日	家一御判	脇坂中務少輔殿
上 178		八月廿一日	秀吉御朱印	藤堂佐渡守とのへ
上 179		九月十三日	秀吉御朱印	藤堂佐渡守とのへ
上 180		九月十三日	秀吉御朱印	羽柴兵庫頭殿・島津又八郎殿
上 181		九月廿二日	太閤御判	太田飛騨守殿
上 182		七月八日	長束大蔵大輔・増田右衛門尉	高麗在番各々中
上 183		正月四日	加藤主計頭・浅野左京大夫・ 太田飛騨守	長束大蔵大輔殿
上 184		正月十七日	御朱印	安芸宰相とのへ
上 185		正月十日	増田右衛門尉長盛・大谷刑 部少輔吉継・石田治部少輔 三成・加藤遠江守光泰・前 野但馬守長泰	—
上 186		正月廿一日	御朱印	羽柴安芸宰相とのへ
上 187		正月十六日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 188		正月廿二日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 189		正月廿五日	同	同
上 190		三月廿三日	同	同
上 191		正月廿一日	御朱印	穴戸備前守とのへ他26名
上 192		三月五日	秀吉	浅野左京大夫殿
上 193		卯月十二日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿
上 194		慶三 四月廿日	御朱印	羽柴伊達侍従殿
上 195		慶三 五月三日	御朱印	小西摂津守とのへ
上 196		慶長三 六月廿二日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ
上 197		慶長三年七月三日	秀吉公御朱印	加藤左馬介とのへ
上 198		十月十五日	長政（花押）	杉伯州殿御宿所
上 199		十一月三日	輝元・景勝・秀家・利家・ 家康各在判	羽柴兵庫頭殿・島津又八郎 殿
上 200		十二月十三日	蓬庵一茂在判	森甚五兵衛とのへ
上 201		六月二十四日	左京大夫幸長	亀田権兵衛殿

出典	注記	備考
右政頼流折紙書例所載		
右肥後藩士高本氏襲藏高本氏祖朝鮮人也慶長征伐之時降干加藤清正為家人後止干肥後為細川家々人		
右征伐記	六月沈惟敬託朝鮮僧松雲大師告清正書	
右同上	清正在西生浦答惟敬書	
右脇坂氏所藏		
右武家古文書		
右同	右同文	
右脇坂氏所藏		
右同		
右武家古文書		
右同		
右同		
右無題古文書所載		
右古今感状集		文書の右に「慶長三年」の見出し
右毛利家記		
右同		
	『按此文書ハ』	
右毛利家記	秀元家中諸士へ被下御朱印、一紙ニ被下也	
右脇坂氏所藏		
右武家文書		
	『泗川』	
右武家文書		

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
上	202		正月五日	—	—
上	203		七月廿一日	明石左近將監元知判	木常人々御中
上	204		八月十三日	御朱印	大和船七拾七艘・とかい船十式艘
上	205		—	—	—
上	206		慶長四年正月九日	安芸中納言輝元・会津中納言景勝・備前中納言秀家・加賀大納言利家・江戸内大臣各在判	羽柴薩摩少將殿参
上	207		—	—	—
上	208		七月廿八日	宗対馬守	—
上	209	奉復	万曆貳拾玖年捌月 日	朝鮮国礼曹参議鄭暉	日本国豊臣平公足下
上	210	奉復	万曆参拾貳年柒月 日	朝鮮国礼装参議成以文	日本国对馬州太守平公足下
上	211		七月五日	秀一	島津修理入道殿
上	212		七月七日	家一御朱印	薩摩少将とのへ
上	213		七月十三日	本多上野介正純判	羽柴陸奥守様貴報
上	214		—	—	—
上	215		—	—	—
上	216		—	—	—
上	217		—	—	—
中	1	御とまり之掟	天正廿年五月五日		安芸宰相とのへ・備前宰相とのへ・小早川とのへ
中	2	上様御とまりとまり			
中	3	東北国衆へ泊々の御合力	八月	増右・黒勘	安国寺
中	4	上様御宿之覚	八月廿日	増右・黒勘	
中	5	御陣へめしつれもの、荷物目録			
中	6	掟	天正廿年正月 日		増田右衛門尉とのへ
中	7	御兵糧被下候事	天正廿年正月五日		毛利壱岐守とのへ・加藤主計頭とのへ・黒田甲斐守とのへ・小西摂津守とのへ
中	8	定	天正廿年		
中	9	御陣普請一所ニ可有候御人数書立之事			
中	10	朝鮮国御仕置城之覚	文禄癸巳式年五月廿日	秀吉	釜山浦
中	11	定	文禄式年癸巳八月七日	秀吉	羽柴安芸侍従とのへ
中	12		八月六日	秀吉	羽柴安芸侍従とのへ
中	13	朝鮮再征秀吉公人数分数目録	慶長二年二月廿一日	秀吉	
中	14		万曆二十五年十二月廿七日申時		
中	15		慶長二年十二月廿九日	平清正判	
中	16		十二月廿九日		
中	17		慶長三年正月二日	平清正判	
中	18	高麗状	文禄三年二月中旬	管木工大夫相吉	

[illegible]

冊	枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
中	19	禁制	天正廿年正月 日		高麗国
中	20	加藤肥州遺書目録			
中	21	朝鮮物成書			
中	22	先手備之事	天正廿年六月三日	(朱印)『豊大闇朱印』	加藤主計頭とのへ・鍋嶋加賀守とのへ
中	23		天正十九年八月廿一日	(朱印)	
中	24	高麗郡御座所普請衆	五月十六日	(朱印)	右之衆中
中	25	於肥後国領知方目録	天正十六年九月四日	(朱印)	
中	26		天正廿年三月十三日	(朱印)	
中	27	肥後国領知方目録之事	天正十六年閏五月十五日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	28	定	天正十六年七月八日	(朱印)	
中	29	覚	天正廿年六月三日	(朱印)	加藤主計頭とのへ・鍋嶋加賀守とのへ
中	30		天正廿年正月五日	(朱印)	毛利宍岐守とのへ・加藤主計頭とのへ・黒田甲斐守とのへ・小西摂津守とのへ
中	31	掟	天正廿年卯月廿六日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	32	條々	天正拾六年七月 日	(朱印)	
中	33		—	(朱印)『豊大闇朱印』	加藤主計頭とのへ
中	34		卯月十六日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	35		九月十六日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	36		二月十八日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	37		六月三日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	38		二月廿七日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	39		十二月晦日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	40		十一月廿二日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	41		五月廿五日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	42		七月十二日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	43		十二月廿八日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	44		十二月十二日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	45		十一月十一日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	46		二月八日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	47		三月六日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	48		五月十四日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	49		五月十九日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	50		十二月廿四日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	51		六月三日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	52		九月廿三日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	53		五月五日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	54		九月九日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	55		十二月廿四日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	56		九月七日	(朱印)	加藤主計頭とのへ

[illegible]

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
中	57		五月廿日	(朱印)	加藤主計頭とのへ
中	58	禁制	天正廿年正月 日	(朱印)	
中	59	禁制	天正廿年正月 日	(朱印)	
中	60	定	天正廿年正月 日	(朱印)	
中	61	定	天正廿年正月 日	(朱印)『豊大閣朱印』	
中	62	定	天正廿年正月 日	(朱印)	
中	63		一	(朱印)『豊臣秀次印』	
中	64		十一月四日	(朱印)『豊臣秀次印』	加藤主計正とのへ
中	65		三月十九日	主膳宗一判	平善ろ
中	66		十一月十七日	加主清正（花押）	結城大炊介殿
中	67	投書	卯月廿三日	加藤遠江守光泰書判	傍木七左衛門殿・長井源右衛門尉殿
下	1		正月二日	御朱印	宮部兵部少輔とのへ
下	2		正月九日	民部卿法印玄以判	駒井中務少輔殿
下	3		正月十二日	吉藏廣家（花押）	黒甲様人々御中
下	4		正月十二日	増右長盛（花押）・大刑少吉継（花押）・石治少三成（花押）・加遠光泰（花押）・前但長泰（花押）	黒甲殿御返報
下	5		正月十三日	光泰（花押）	黒甲斐守様御陣所
下	6		正月十三日	小左衛門隆景判	黒甲様御陣所
下	7		正月十三日	増右	鍋嶋加賀守様御陣所
下	8		正月十四日	吉継	鍋嶋加賀守殿御返報
下	9		正月十四日	秀元御判	内藤周竹ろ床下
下	10		正月十六日	御朱印	松浦刑部卿法印
下	11		正月廿六日	御朱印	宮部兵部少輔とのへ
下	12		文禄貳年正月廿七日	上巻き石治少三成判「石田治部少輔」	吉川蔵人至殿御陣所
下	13		正月十八日	廣家判 裏ニ吉蔵人	宗虎様参人々申給へ
下	14		文禄二年正月 日	(朱印)	飛州ニ面金森出雲守留守居中
下	15		文禄二年正月 日	秀次朱印	
下	16	定	文禄二年正月 日	御朱印	肥前国
下	17		二月二日	上巻ニ丹羽五平次家判	吉川侍従様人々御中
下	18		二月二日	安国寺志隆（マ）判	宗虎様人々御中
下	19		二月五日	駒井	黒田勘解由様人々御中
下	20		二月廿二日		黒田勘解由とのへ
下	21		二月廿二日		黒田甲斐守とのへ
下	22		文禄二年二月五日		
下	23		二月八日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下	24		二月九日	(朱印)	福岡左衛門大夫殿
下	25		二月九日	御朱印	宮部兵部少輔とのへ

出典	注記	備考
		77丁から81丁まで5紙は帝国博物館の異紙
以上六十七張加藤肥州遺書		
	右筑後三池立花数馬より得て写此外ニ 数百通の文書ありと云々	
	我家の所蔵先代の族人佐渡民部少輔長 重男傍木七左衛門尉長攻文禄征韓の役 加藤遠江守光泰殿よりの書状	
宮部家御判物御朱印写		1丁から32丁まで32紙は帝国博物館の異紙
武家事紀古案		
黒田文書		
黒田文書		
黒田文書		
黒田家譜		
周防家差出鍋嶋直茂譜考補卷七		
周防家差出鍋嶋直茂譜考補卷七		
萩藩閤録卷ノ九十九ノ一内藤小源太		
松浦家藏御内書写		
宮部家御判物御朱印写		
吉川家什書於高麗郡合戦之時		
立齋旧聞記		
飛州志 飛州地役人河上政従家藏		
前田家所蔵文書		
鍋島直茂譜考補		
吉川家什書高麗		
立齋旧聞記		
駒井日記		
薩藩旧記		
加藤清正家藏書		
神田孝平所蔵文書		
宮部家御判物御朱印写		

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
	下 26		二月九日	御朱印	三輪五右衛門とのへ・百々三郎左衛門とのへ・谷出羽守とのへ・石川備前守とのへ・別所豊後守とのへ・服部采女正とのへ・一柳右近太夫とのへ・竹中源助とのへ・羽柴郡上侍従とのへ・明石左近とのへ・神藤左兵衛尉とのへ・木下備中守とのへ・南条左衛門とのへ・宮部兵部少輔とのへ
	下 27		二月九日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 28		二月九日	てる元御判	柳新右
	下 29		天正廿一年二月十三日	元頼判	伊藤六太夫殿
	下 30	覚	二月十六日	(朱印)	黒田甲斐守とのへ・羽柴豊後侍従とのへ
	下 31	覚	文禄二年二月十八日		羽柴備前宰相とのへ
	下 32		二月十六日	御朱印	善「釜」山宮部兵部少輔とのへ
	下 33		二月十八日	御朱印	加藤主計頭とのへ
	下 34		二月十八日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 35		二月十八日	御朱印	けいきん
	下 36		二月十九日	久保（花押）・義弘（花押）	猿渡掃部兵衛殿
	下 37		二月廿日	御朱印秀吉公	清見寺
	下 38	條々	二月廿七日	備前宰相秀家判・筑前侍従隆景判・吉川侍従広家判・豊後侍従吉統判・小西撰津守行長判・毛利老岐守吉成判・黒田甲斐守長政判・前野但馬守長泰判・加藤遠江守光泰判・大谷刑部少輔吉継判・石田治部少輔三成判・増田右衛門尉長盛判・福島左衛門大夫正則判・生駒雅楽頭近則判・蜂須賀阿波守家政判・加藤主計頭清正判・鍋島加賀守直茂判	
	下 39		二月廿八日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 40		二月晦日	御朱印	松浦刑部卿法印・宇久大和守とのへ・大村新八郎とのへ・有馬修理太夫とのへ
	下 41		二月晦日	秀吉公ノ御朱印	毛利七郎兵衛尉とのへ
	下 42		癸巳仲春初九	両王子一致判	加賀守大上官前
	下 43		癸春旬日	王君一致判	加賀守殿上官座前呈覆
	下 44		万曆二十一年癸巳二月 日	討捕別將柳	
	下 45		日本天正廿一載癸巳二月 日	豊臣直茂	
	下 46			左衛門佐隆景	點庵様御下

出典	注記	備考
萩藩関閥録卷十ノ四堅田安房		
萩藩関閥録卷ノ二十一柳沢靱負		
萩藩関閥録卷ノ六十六伊藤彦右衛門		
黒田文書		
鍋島直茂譜考補	○ハハ六ノ誤ナルヘシ	
宮部家御判物御朱印写		
加藤清正家蔵書		
萩藩関閥録卷十ノ四 堅田安房		
水江事略		
薩藩旧記雜抄		
古今消息集		
前田家所蔵文書		
萩藩関閥録卷三 毛利大蔵		
松浦家蔵御内書写		
萩藩関閥録卷三 毛利大蔵		
普閑集		
集古文書七十六 屋代弘賢蔵	按本書月日ヲ欠ク今去月廿六日ノ文ニ 因リ二月中ニ置ク	

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
	下 47		三月三日	増田右衛門守長盛・大谷刑部少輔吉繼・石田治部少輔三成・加藤遠江守光泰・前但馬守長奔（マ）・黒田甲斐守長政・小西拱津守行長・毛利玄岐守吉成・加藤主計頭清正・鍋島加賀守直茂・福岡左右（マ）衛門大夫正則・生駒雅楽頭近規・蜂須賀阿波守家政・豊後侍従吉統・吉川侍従広家・小早川左衛門佐隆景・備前宰相秀家・久儀（花押）	長束大蔵太輔殿・木下半助殿・山中橋内殿
	下 48		三月三日	直茂	西五太・田源男
	下 49		文禄式年三月四日	（朱印）	おんとの瀬戸舟奉行中
	下 50		三月六日	御朱印	加藤主計頭とのへ
	下 51		三月十九日	（朱印）	筑紫上野介とのへ
	下 52		三月十九日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 53		三月十九日	主膳宗一判	平善男
	下 54		三月廿日	上巻ニ宮部法印繼潤判	吉川蔵人佐殿
	下 55		三月廿日		長束大蔵太輔殿・木下半介殿
	下 56		三月廿八日	秀吉朱印	脇坂中務少輔とのへ
	下 57		卯月三日	秀吉御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
	下 58		文禄二卯月三日	秀吉公ノ御朱印	羽柴久留米侍従とのへ
	下 59		卯月五日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 60		卯月五日	太閤様御朱印	羽柴久留米侍従とのへ
	下 61		卯月五日	太閤様御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
	下 62		卯月五日	太閤様御朱印	高橋主膳正とのへ
	下 63		卯月五日	秀吉公御朱印	毛利七郎兵衛尉とのへ
	下 64		卯月九日	秀次公御朱印	羽柴筑前侍従とのへ
	下 65		卯月十一日	秀吉御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
	下 66		卯月十一日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
	下 67		卯月十四日	加主計清正判	宍戸九郎左殿人々申給へ
	下 68		卯月十四日	秀吉朱印	関白殿
	下 69		卯月十五日	秀吉御朱印	関白殿
	下 70		卯月十六日	御朱印	加藤主計頭とのへ
	下 71		卯月十六日	御朱印	松浦刑部卿法印
	下 72		卯月十六日	秀吉公御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
	下 73		卯月十六日	秀吉公ノ御朱印	毛利七郎兵衛尉とのへ
	下 74		卯月十七日	秀吉御朱印	加藤主計頭殿へ
	下 75		卯月十八日	清正（花押）	長谷右兵衛人々中
	下 76		卯月廿一日	義弘御判	伊勢弥次郎殿
	下 77		卯月廿六日	輝元公御印形	三上豊後守とのへ

出典	注記	備考
探訪文書 土佐香美郡赤岡村濱政弘蔵 明治廿一年六月	「四月十一日」	
鍋島直茂譜考補		
上杉年譜景勝		
加藤清正家蔵書		
筑紫古文書		
萩藩閥閥録卷十ノ四 堅田安房		
一話一言第十六高橋主膳書状	「右筑前三池立花数馬ヨリ得之写此外 に数百通の古文書ありと云○中外経緯 伝ニモ収載セリ」	
吉川家什書高麗へ		
楓軒文書纂	「○加藤清正家蔵書及ヒ下川文書所見 ナシ」	33丁より59丁まで27紙は臨時全 国宝物取調局
脇坂家譜		
立花家蔵感状記		
萩藩閥閥録卷四 毛利伊豆		
萩藩閥閥録卷十ノ四 堅田安房		
萩藩閥閥録卷三 毛利大蔵		
小早川什書卷九		
立花家蔵感状記		
萩藩閥閥録卷ノ十ノ四 堅田安房		
萩藩閥閥録卷廿四 宍戸宮内		
武家事紀古案		
武家事紀古案		
加藤清正家蔵書		
松浦家蔵御内書写		
中外経緯伝	「右武家古文書集」	
萩藩閥閥録卷三 毛利大蔵		
楓軒文書纂		
探訪文書 兵庫縣但馬国養父郡高柳村 福田恭一所蔵		
薩藩旧記雜抄		
萩藩閥閥録卷百廿八 三上喜左衛門		

冊	枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
下	78		卯月廿八日		片桐市正とのへ・加須屋内膳正とのへ
下	79		卯月廿八日	桂三郎兵へ判	福式様
下	80		五月朔日	御朱印	松浦刑部卿法印
下	81		五月朔日	浅野弾正長政	龍造寺民部太輔殿
下	82		文禄三年五月朔日	御朱印	羽柴備前宰相殿へ他82名
下	83	覚	文禄二年五月朔日	御朱印	高麗在番衆中 名付御使者へ申入
下	84		五月朔日	御朱印	羽柴薩摩侍従とのへ
下	85	覚	文禄二年五月朔日	加藤主計頭・鍋島加賀守・其外諸大名	
下	86	覚			
下	87		文禄三年五月三日		朝鮮在陣衆参
下	88	大明与日本和平相定条々	文禄二年五月朔日	御朱印	浅野弾正とのへ・黒田勘解由とのへ・増田右衛門尉とのへ・石田治部少輔とのへ・大谷刑部少輔とのへ
下	89	大明日本和平相定條	文禄二年五月朔日	秀吉公御朱印	浅野弾正少弼殿・黒田勘解由入道如水殿・増田右衛門尉殿・石田治部少輔殿・大谷刑部少輔殿
下	90		文禄二年五月朔日	御朱印	浅野弾正少弼・黒田勘解由・増田右衛門尉・石田治部少輔・大谷刑部少輔
下	91		五月三日	御朱印	島津又七郎とのへ
下	92		五月三日	御朱印	鍋島加賀守とのへ・同信濃守とのへ
下	93		五月五日	右馬頭輝元公御判	廣家御陣所
下	94		五月五日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下	95		五月十四日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下	96		五月十四日	生駒雅楽守進規（花押）・前野但馬守長泰（花押）・加藤遠江守光泰（花押）・福島左衛門大夫正則（花押）・戸田民部少輔勝隆（花押）・蜂須賀阿波守家政（花押）	長東大藏大輔殿・木下半介殿・山中橋内殿
下	97		五月十八日	竜伯（花押）	鎌田出雲守殿・町田出羽守殿・長寿院
下	98		五月十九日	長東大藏大輔正家判	隆景様貴報
下	99	朝鮮国御仕置之城之覚	文禄癸巳二年五月廿日	秀吉御朱印	
下	100	朝鮮国御仕置之城之覚	文禄癸巳二年五月廿日	秀吉御朱印	
下	101		五月廿一日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
下	102		五月廿一日	秀吉公御朱印	羽柴吉川侍従とのへ
下	103		五月廿一日	秀吉朱印	羽柴対馬侍従とのへ

出典	注記	備考
古文書集 片桐主膳正家蔵		
萩藩閥閥録卷ノ二十 桂勘右衛門		
松浦家蔵御内書写		
鍋島直茂譜考補	「○文禄元年十二月十四日秀吉ノ書三着スヘシ」	
秀吉公御朱印之写	「○二年ノ誤ナリ」「高麗国御陣之刻従太閤様諸大名江被仰遣御朱印之写 文禄三年葉月上旬ニ写託 右写ノ正文高城住人山口孝右衛門ニ有之」	
薩藩旧記島津家文書		
薩藩旧記島津家文書		
鍋島直茂譜考補		綴り込みあり
太閤記		綴り込みあり
黒田家譜		
日向記		
鍋島直茂譜考補○高麗軍記		
薩藩旧記永吉邸蔵書		
鍋島直茂譜考補		
吉川家什書		
加藤清正家蔵書		
加藤清正家蔵書		
前田家所蔵文書		
薩藩旧記島津氏文書		59丁から最終丁まで48紙は帝国博物館の野紙
萩藩閥閥録卷ノ四 堅田安房		
楓軒文書纂		
中外経緯伝	「右武家古文書集」	
萩藩閥閥録卷ノ四 堅田安房		
吉川家什書高麗都合戦之時		
松平義行所蔵文書		

冊	枝	原表題	年月日	作成・発給	宛名
下	104		五月廿三日	太閤様御朱印	羽柴小早川侍従とのへ
下	105		五月廿六日	義昭公御判	隆景へ
下	106		五月廿六日	真木嶋玄蕃頭昭光判	隆景様人々御中
下	107		五月廿七日	義弘	水野久右衛門殿・熊谷半次殿
下	108		五月廿八日	御朱印	鍋島加賀守とのへ
下	109		万曆廿一年六月初二日	順和君押・臨海君押・行護軍押・南兵使押・長溪君押	
下	110		六月三日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下	111		六月三日	輝元御判	吉見次郎兵衛尉殿
下	112		万曆二十一年六月初四日	朝鮮王子臨海君花押	
下	113				
下	114		六月六日	氏郷（花押）	宛名欠
下	115		六月六日	輝元公御判	村上三郎兵衛尉とのへ
下	116		文禄貳年六月七日	隆景御判	村上掃部頭様
下	117		六月七日	輝元公御判	村上三郎兵衛尉とのへ
下	118		六月七日	毛甲元清御判	村三兵衛
下	119		文禄二年六月七日	隆景御判	清水五郎右衛門尉殿
下	120		文禄二年六月七日	隆景御判	清水五郎右衛門尉殿
下	121		文禄二癸巳	輝元御判	佐波越後守とのへ
下	122	覚	文禄二年六月十一日		
下	123		六月十三日	長束大蔵太蔵正家判・石田木工頭正澄判・寺沢志摩守正成判	多久肝煎飯盛善右衛門
下	124		六月十八日	秀吉朱印	関白殿
下	125		文禄二年六月六日		
下	126		六月廿五日	輝元御判	多賀九左衛門とのへ
下	127		文禄貳年五月廿日	江戸大納言（花押）他19名	
下	128		文禄貳年五月廿日	常心（花押）他31名	
下	129		年月日同	青木紀伊守（花押）他67名	
下	130		正月廿五日	（朱印）『豊公朱印』	加藤主計頭とのへ
下	131		六月三日	（朱印）『豊公朱印』	羽柴対馬侍従とのへ
下	132		文禄四年正月十五日	御朱印	島津又七郎殿
下	133		萬曆二十三年正月二十一日	（朱印）	
下	134		萬曆二十三年正月二十三日	（朱印）	皇帝勅諭日本国王平秀吉
下	135		正月廿八日	御朱印	松浦刑部卿法印
下	136		正月廿八日	秀吉公ノ御朱印	毛利七郎兵部尉とのへ
下	137		正月廿八日	秀吉公御朱印	羽柴安芸侍従とのへ
下	138		萬曆貳拾參年貳月初四日給	兵部為欽奉	
下	139		萬曆貳拾參年貳月 日給	兵部為欽奉	

出典	注記	備考
萩藩閩閩録卷十ノ四 堅田安房		
萩藩閩閩録卷十ノ一 堅田安房		
薩藩旧記島津家文書		
鍋島直茂譜考補○周防家記		
朝鮮王子真跡徳川茂承所蔵		
加藤清正家蔵書		
萩藩閩閩録卷六 毛利伊勢		
中外経緯伝	「右紀藩士九鬼氏蔵 家祖九鬼九郎兵衛吉隆初仕加藤清正役朝鮮其末孫後為紀州家臣故子孫蔵遺書下同」	
鍋島直茂譜考補		
採訪文書 本法寺屏風貼付		
萩藩閩閩録卷二十三 村上一学		
萩藩閩閩録卷二十二ノ二 村上図書		
萩藩閩閩録卷二十三 村上一学		
萩藩閩閩録卷二十三 村上一学		
萩藩閩閩録卷廿五 清水宮内		
萩藩閩閩録卷七十一 佐波庄三郎		
中外経緯伝 加藤清正軍令	「右紀伊藩士九鬼氏蔵」	
水江事略		
武家事紀古案		
薩藩旧記雜抄	「薩摩大隅日向嶋津義久留守居中与宛書有之也」	
萩藩閩閩録卷四十四 洞玄寺	「右烏丸兵部少輔野添帯刀長ナルヘシ」	
帝国博物館所蔵一卷		
	「前同文」「右一卷」	
薩藩旧記永吉邑主蔵		
萬曆詰命 石川子爵蔵	「綾織地切毫尺…太閤秀吉得書擲之地堀尾吉晴採之而蔵ス後年堀尾家没収ノ際石川家勢州亀山城主近親ノ故ヲ以テ此書ヲ伝テ今ニ至ル」、『大四寸四分四方』	
萬曆勅諭		
松浦家蔵御内書写		
萩藩閩閩録卷三 毛利大蔵		
中外経緯伝	「右武家古文書集」	
萩藩閩閩録十ノ三 小早川家什書同		
上杉家蔵		

冊 枝	原 表 題	年 月 日	作 成・発 給	宛 名
下 140	奉再復慶尚左右道防禦使兼兵曹節度使金大人幕下	文祿四歳乙未上巳後日	日本豊茂守	
下 141		文祿四年乙未三月七日	義弘	本野入・新武入・町羽入
下 142		文祿四年卯月六日	安宅三河守秀（花押）	羽兵様參御報
下 143		文祿四年卯月十二日	御朱印	羽柴薩摩侍従とのへ
下 144		文祿四年卯月十八日	御朱印	羽柴薩摩侍従とのへ
下 145		五月十九日	（朱印）	黒田甲斐守とのへ
下 146		五月十九日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下 147		五月十九日	御朱印	松浦式部卿法印
下 148		五月十九日	御朱印	嶋津又七郎とのへ
下 149		五月十九日	秀吉公御朱印	毛利七郎兵衛尉とのへ
下 150		五月廿一日	伊弥八■（花押）	
下 151		五月廿四日	御朱印	鍋島加賀守とのへ
下 152		五月廿四日	秀吉公御朱印	毛利治部大輔とのへ・毛利七郎兵衛尉とのへ
下 153		文祿四年六月二日	御朱印	島津又七郎とのへ
下 154		文祿四年六月廿四日	御朱印	島津又七郎とのへ
下 155		文祿四 六月廿九日	御朱印	羽柴薩摩侍従とのへ
下 156	知行方目録	文祿四年六月廿九日	太閤御朱印	龍伯
下 157		文祿四年七月十日	御朱印	羽柴薩摩侍従人数
下 158		七月十日	秀吉御朱印	羽柴柳川侍従とのへ
下 159		文祿式年乙未七月十一日	忠恒	新納武蔵入道殿
下 160		七月十二日	御朱印	加藤主計頭とのへ
下 161		文祿四 七月十五日	朱印	生駒雅楽頭とのへ
下 162		文祿四年七月廿五日	龍伯花押 義久	又八郎殿
下 163		文祿四年乙未七月廿五日	義弘	新武入
下 164		八月廿一日	伯	きよ水
下 165		文祿四年八月廿七日	御朱印	嶋津又七郎とのへ
下 166		文祿四年乙未九月十日	忠恒	新納武蔵入道殿
下 167		文祿四年九月十三日	義弘御判	喜入摂津介とのへ
下 168		文祿四年九月十三日	義弘花押	又八郎殿
下 169		文祿四年九月廿三日	御朱印	嶋津又七郎とのへ
下 170		十月十九日	長大蔵	山口玄蕃允殿
下 171		文祿四年乙未十月廿六日	忠恒	新納武蔵入道殿
下 172		十月廿八日	御朱印	鍋島加賀守とのへ
下 173		文祿四年乙未十一月廿四日	忠恒	新納武蔵入道殿
下 174	公領	文祿四季十一月廿六日	輝元公御印形	三上七郎右衛門とのへ
下 175		十二月十六日	御朱印	伊藤民部大輔とのへ
下 176		十二月廿日	御朱印	嶋津又七郎とのへ

凡例 『 』は朱書

（ ）は引用史料の考証や編者による考証などから入力者が補足

出典は表記通り

注記は選別して、表記通り

■は解読難

出典	注記	備考
鍋島直茂譜考補		
薩藩旧記写雜抄		
薩藩旧記島津氏文書		
薩藩旧記島津氏文書		
薩藩旧記島津氏文書		
黒田文書		
加藤清正家藏書		
松浦家藏御内書写		
薩藩旧記永吉邸文書		
萩藩閤録 毛利大藏		
薩藩旧記雜抄	「文四カ」「宛書ナシ」	
鍋島直茂譜考補周防家記		
萩藩閤録三		
薩藩旧記永吉邑吉藏		
薩藩旧記永吉邑吉藏		
薩藩旧記島津氏文書		
薩藩旧記島津氏文書		
薩藩旧記島津氏文書		
立花家藏感状記		
薩藩旧記正文在新納氏		
加藤清正家藏文書		
生駒家古文書		
薩藩旧記島津家文書		
薩藩旧記新納氏藏		
薩藩旧記正文在垂水郡奄伯公所賜御書也		
薩藩旧記永吉領主藏		
薩藩旧記正文在新納氏		
薩藩旧記正文在喜入氏		
薩藩旧記島津氏文書		
薩藩旧記永吉領主藏書		
立斎旧聞記		
薩藩旧記新納氏藏書		
鍋島直茂譜考補		
薩藩旧記新納氏藏書		
萩藩閤録百廿八三上喜左衛門		
日向記		
薩藩旧記永吉領主島津氏藏書		